

10. 過剰雇用の推計

10.1 生産性方式による推計

①指標の解説

日本では、雇用調整の手段として、所定外労働時間（残業時間）の削減、配置転換や出向、希望退職などがとられる場合が多く、直接的な解雇は回避される傾向にあるといわれる。このため、直接的な解雇に踏み切る前には生産量に見合う以上の労働力、いわゆる過剰雇いを抱える傾向にある。

ここでは、我が国の過剰雇用量を推計してみることにする。過剰雇用量が大きい場合、それだけ我が国企業の雇用保障が高いことになるが、一方では労働生産性の低下を招くなどの影響もでてくることになる。

過剰雇用量の推計にはいくつかの方法があるが、以下で2つの方法により推計する。その第1の方法として、本項では生産性方式による推計を行う。これは、労働生産性が適正な水準にあるときに、その時々を生産水準に見合う労働投入量を推計して、その労働投入量が平均的な労働時間で投入された場合の雇用量を必要雇用量とし、現実の雇用量とこの必要雇用量との差を過剰雇用とするものである。なお、第2の方法については次項で扱う。

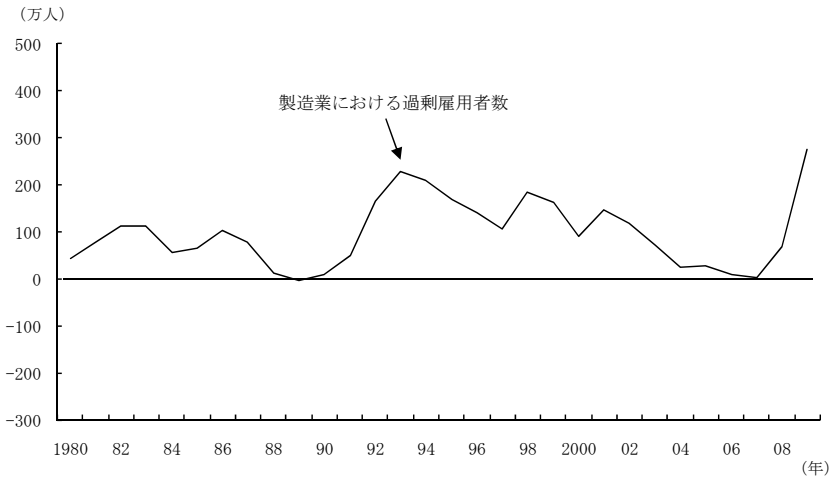
②指標の作成結果

製造業について、生産性方式による過剰雇用の推計を行った。結果は図10-1のとおりである。

③作成結果の説明

推計結果をみると、1980年前半から円高不況期まで過剰雇用が存在し、その後、景気が反転してバブル経済に入ると、過剰雇用は解消した。バブルが崩壊した後は再び過剰雇用が生じている。最近は減少傾向で推移してきたが、直近の2007-2009年は過剰雇用量が増加している。

図 10-1 生産性方式による過剰雇用量



資料：「労働力調査」、「毎月勤労統計調査」、「鉱工業生産指数」

④ 指数の作成方法

生産性方式による過剰雇用量の推計は、昭和 62 年版労働白書の方法によった。具体的には次のとおりである。

まず、適正水準の労働生産性を推計する。生産水準に見合った最適な労働生産性を正確に計測するのは難しいので、以下の方法で近似する。稼働率とタイムトレンドの 2 変数を説明変数とする労働生産性関数を計測し、これに計測期間中のピーク時の稼働率を代入した結果を、適正労働生産性とした。

$$\text{製造業：} Y / (L * H) = -14.47 + 0.62 \rho + 1.99t$$

$$(-2.42) \quad (11.0) \quad (42.5) \quad () \text{ は } t \text{ 値}$$

計測期間 1980 年～2009 年

$$R^2 \text{ (自由度修正済み)} = 0.9857$$

$$D.W. = 0.3312$$

ただし、Y：生産指数

L：常用雇用指数 H：総実労働時間指数 ρ ：稼働率指数

以上で求めた適正労働生産性に平均的な労働時間を用いて、次式による過剰雇用率を求めた。

$$E = \{L - Y / (P^* \cdot H^*)\} / L$$

E : 過剰雇用率 P^* : 適正労働生産性

H^* : 平均的な労働時間 (H = 定数項 + トレンド項 (推計期間の何年目かを示す値) なる回帰式を推定し、その結果を用いて算出される労働時間の理論値)

こうして求めた過剰雇用率に「労働力調査」の雇用者数を乗じて過剰雇用量を求めた。

⑤指標のデータ

指標の作成結果は表 10-1 のとおりである。

⑥備考

『ユースフル労働統計 2009』では、全産業についても、稼働率を製造業のもので代用して関数を計測したが、今年度は関数のフィッティングが良くないため、全産業における過剰雇用の試算は取り止めた。

表 10-1 生産性方式による過剰雇用量

(単位：万人)

年	製造業
1980	43
1981	77
1982	111
1983	111
1984	57
1985	64
1986	104
1987	79
1988	11
1989	-3
1990	9
1991	49
1992	167
1993	227
1994	209
1995	170
1996	140
1997	107
1998	183
1999	162
2000	89
2001	148
2002	119
2003	70
2004	26
2005	29
2006	9
2007	4
2008	69
2009	274

資料：「労働力調査」、「毎月勤労統計調査」、「鉱工業生産指数」

10.2 人件費比率方式による推計

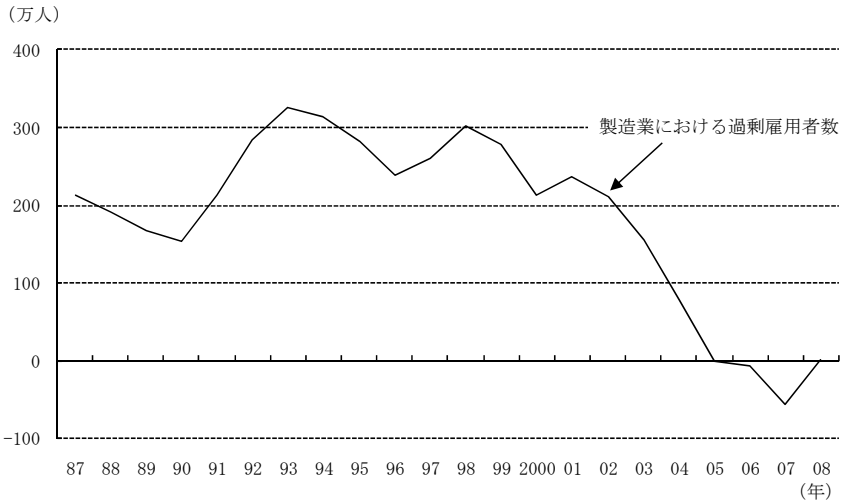
①指標の解説

ここでは第2の方法である人件費方式によって過剰雇用量を推計する。企業にとって、売上高に占める人件費の割合（売上高人件費比率）が高まると、人件費の負担感が強まってくる。そこで、賃金を一定としたときに、仮にある一定の売上高人件費比率を保つことのできる雇用量を適正雇用量として、この適正雇用量を上回る分を人件費ベースの過剰雇用量と考えて推計した。

②指標の作成結果

人件費方式によって製造業における過剰雇用量を推計した。結果は図10-2のとおりである。

図10-2 人件費方式による過剰雇用量（製造業）



資料：「法人企業統計調査」、「労働力調査」、「全国企業短期経済観測調査」

③作成結果の説明

ここでは、日銀の製造業における雇用人員判断 D.I.がゼロにもっとも近い年(2005年)における売上高人件費比率を基準として推計しているため、2005年の過剰雇用量はゼロとなり、それ以外の年で雇用の過不足が生じることになる。

推計結果をみると、1980年代後半から2004年にかけて過剰雇用が生じている。特に、1992-1995年にかけてと1997-1999年にかけて過剰雇用量が大きくなっている。2002年以降、過剰雇用量は減少し、2006-2007年は労働力不足となったが、直近の2008年は増加に転じ、労働力不足は解消している。

④指標の作成方法

人件費方式による過剰雇用量の推計は、次式により過剰雇用率を求め、その結果に「労働力調査」の雇用者数を乗じたものを過剰雇用量とした(昭和62年版労働白書参照)。

$$\text{過剰雇用率} = (\text{売上高人件費比率} - \text{2005年の売上高人件費比率}) \\ \text{ / (売上高人件費比率)}$$

基準年次を2005年としているが、これは、ここ数年で日銀の雇用判断 D.I.がゼロにもっとも近い年として選んだものである。なお、売上高人件費比率は「法人企業統計」によった。(人件費には役員賞与を含めていない。)

⑤指標のデータ

指標の作成結果は表 10-2 のとおりである。

表 10-2 人件費方式による過剰雇用量

(単位：万人)

年	全産業	製造業
1987	-290	213
1988	-504	191
1989	-450	167
1990	-587	154
1991	-278	213
1992	-23	284
1993	233	326
1994	337	314
1995	220	282
1996	204	239
1997	307	260
1998	609	301
1999	564	278
2000	403	212
2001	506	237
2002	470	210
2003	292	155
2004	171	78
2005	0	0
2006	-84	-6
2007	-249	-56
2008	2	1

資料：「法人企業統計調査」、「労働力調査」、「全国企業短期経済観測調査」